

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

2 中学校教員

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

「東日本大震災を体験して」

第一中学校 教諭 永野 寛子

1 震災発生当日から避難所設立まで

3月11日、午後2時46分。卒業式も無事に終わり、生徒達も全員下校。遅めの昼食後、談話室で一息ついている時だった。ことごと揺れ始める。次第に大きくなってくる揺れ。瞬時に停電。そろそろ収まるだろうとじっとしていたが、激しい揺れは何回にもわたって襲ってきた。この地震はおかしい…そう感じたのを覚えている。

ここから一中職員は、校長の指示のもと動き始める。揺れが収まって、校舎内の点検をしていると、市の防災無線で「大津波警報」が発令される。津波の高さは「6メートル」と放送されたが、「8メートル」「10メートル」と変更された。指定避難所である一中に地域の方々が避難してきた。その中には、下校した後の生徒達もいた。友人宅にいたところの地震。海に近い自宅には帰らず、学校に避難してきたと話す。降り出した雪の中、防災備蓄倉庫から「毛布・飲料水・ストーブ・アルファ化米など」を校舎内に運び入れる。その作業中(地震経過から30分程度)に津波は、塩竈市内に到着した。当初、避難された方々を、体育館に誘導しようとしたが、照明が落ちてガラスの破片があることや、余震でのさらなる落下が心配されるため、1階1年生教室に誘導した。

このときから、教室は避難所へと、その役割を変えた。保健室が、塩竈市役所の大和田さんと校長を司令塔とした対策本部となる。備蓄倉庫から運び出したマットを床に敷き、毛布を次々と配った。大きな余震のたびに、校庭への避難を繰り返した。この日、400人近くが学校

に避難。一教室70人近く。(これ以後の避難者数は、12日330人程度、13日250人程度、14日200人程度。16日119人、18日約100人。) 備蓄していた毛布が足りなくなり、一枚の毛布を何人かで使っていただくようになった。各部屋ごとに担当職員を決めての対応が指示される。やがて、外が暗くなり始め、バケツに立てたろうそく、ストーブを教室・廊下に設置した。給食室では、いち早く開放を決め、プロパンガスを使って夕食の準備を始める。栄養士さん・調理員さんの指揮のもと、アルファ化米によるおにぎりを作るようになった。夕食準備のために、各教室から体力のある若い男性で協力してくださる方を募ることになる。私が担当した教室でも呼びかけると、市内に支店のある銀行の行員の方々が、名乗りをあげてくださった。ろうそくの薄明かりのもと400人分の夕食を作り、各部屋ごと一人ひとりに配った。不安な中でも、冷静に行動してくださったので、大きな混乱も起きなかった。ただ、急いで避難し、薬を持ってこなかったのが、発作が心配だという女性からの相談があった。診察券にあった災害時の緊急ダイヤルを見つけ、公衆電話から連絡。翌日、病院から薬が届いたと聞いた時には本当にほっとした。この11日夜から、男性職員を中心に交代で避難所の夜間対応と、学校周辺の夜間巡視が始まる。夜、ラジオから地震・津波の被害状況を聞き、たいへんなことが起きてしまったことを知る。

2 避難所運営から学校再開まで

12日(翌日早朝)、学校に向かう。横転した車、がれきが散乱した泥だらけの道路…ショックを受ける。校庭にはたくさんの車があり、車内で過ごされた方々もいたことを知る。高台の校舎から、仙台港に隣接する石油精製施設が炎上している様子が見えた。朝食は、乾パン。いっ食料が入るか分からないので、本部は残りを考えながら一人どのくらい配給するか決めてい

く。停電，断水も続き，物資も届かず，緊張感が続く。

避難所3日～4日目（13日～14日）には，各部屋の班長を決めていただき，本部からの連絡や，食事の配給が行われ始める。また，それまで緊急時対応だった土足が，衛生面を考え「土足禁止」の対応に変わる。ゴミ箱の設置・トイレの清掃・トイレ用の水のプールからのバケツリレー，給水用のバケツリレー，食事の準備も，職員で協力して次第にスムーズに行われるようになってきた。また，地域の方々への給水も行った。容器をもって整然と並んで順番を待ってくださり，ここでも大きな混乱はなかった。これも，他県からやってきてくれた給水車のおかげだ。子ども達にと両手いっぱいのお水をくださった優しさは忘れられない。

避難所では，ペットへの対応も判断が迫られた。部屋に置きたいという気持ちは十分すぎるぐらい理解できる。しかし，ご高齢の方，病弱な方が部屋を共有することを考え，ペットは外につないでいただくことになった。せめて飼い主の方が見えるようにと，窓近くに段ボールで小屋を作った。13日23：00，電気が復旧。校舎内に災害用電話が設置される。

16日（6日目）14：07，全校生徒の安全が確認できた。生徒の安全確認は，震災翌日から始めていた。来校する生徒本人，見かけた生徒の情報を，一つの生徒名簿に集約していった。浜田，七ヶ浜など海沿いの生徒宅には，震災翌日に訪問し，安全を確認した。14日には，1・2学年の生徒ほぼ全員の確認が完了。卒業生である3年生は，78人65%を確認。16日，各学年で確認がとれない生徒宅へ再度訪問。最後の一人が，市役所に避難している事が判明し，全校生徒の安全が確認できた。1学年117人，2学年108人，3学年113人の計338人。全員無事で，心から安堵した。この頃になると，避難所での生活は，職員だけではなく各部屋の班長さんたちを中心に，「バケツリレ

ー・トイレの清掃・ゴミの分別・食事の配給など」がスムーズに行われるようになっていた。避難されている方々の冷静な行動に励まされる気持ちになった。

18日（8日目）一週間ぶりに水道が通った。みんなで喜んだ。一日2度行われる校長会に代理で出席していたので，市内のライフラインの復旧の状況などを随時聞くことができた。その際，電気・水道関係の方々が，不眠不休で作業にあたってくださいていることを知った。今でも感謝している。

避難者数が減少し，運営が軌道に乗ってきた頃，学校再開の仕事にも取りかかり始めた。雑然としていた職員室の片付け，3年生担当は卒業生の進路関係の仕事も残っている。そして，予定よりも遅れて（3月24日）平成23年度の修了式・離任式を行った。やがて，第一中学校の避難所は，3月いっぱい閉鎖となる。大変な状況の中，進んで避難所運営に協力して下さった方々が，バスで公民館へと移動されるのを見送るときは，胸がいっぱいになった。まさに不眠不休で避難所を支えて下さった市役所職員の皆さんにも感謝の気持ちでいっぱいだ。

4月に入ると，新学期をスタートできるように，教室の復旧を始めた。教室・廊下・トイレの清掃，備品の搬入，前年度のままの掲示物や荷物の片付け。部活動を再開した生徒たちも一緒に手伝ってくれた。多くの卒業生たちが，制服・ジャージ・教科書など学用品を寄付してくれた。こうして4月21日新学期をスタートすることができた。

3 震災を通して学んだこと

①避難所としての役割

指定避難場所で高台にある塩竈一中は，何よりも津波から地域の方々を守る場所である。災害備蓄倉庫には，毛布や食料が多数確保され，被災して自宅に帰ることができない人々を支える役割は大きい。また，水道が止まった際には，

給水の拠点としても重要な場所となる。「地域の中の学校」として、学校は地域と連携していかなくてはいけないと思った。同時に、そこに勤める私たち教職員も、地域の方々を支えるのだという意識を高くもっていかなくてはいけない。

②生徒への継続的な防災教育

全校生徒が無事であったことが不幸中の幸いであった。下校後の日中ということで、生徒達だけでいる時に地震に遭遇した。後日、高台にある学校に逃げる判断で事なきを得た生徒と保護者の方に話を伺った。そのご家庭では、どこにいても地震があったら家ではなく学校に行くことを日頃から約束していたらしい。このことから、生徒への防災教育がいかに重要か再確認した。具体的な場所（校舎内・下校後）での具体的な避難行動を、避難訓練時だけでなく、日常の学校生活の中で継続的に指導していくことが重要だ。

本校でも、全校での避難訓練を継続的に行ってきた。第一次避難場所は、校庭の備蓄倉庫前である。生徒たちは訓練に真剣に取り組み、すばやく避難行動がとれている。しかし、本校の場合、地震による火災が危惧される。風向きによっては、第一次避難場所にも熱風や火の粉がくる可能性もある。震災後に行われた訓練では、第一次避難場所から住宅街を抜けて別な場所に避難する経路も確認した。今後の避難訓練では、このような状況への対応も訓練しておく必要がある。同時に私たち教職員は、様々な場面での避難行動を想定し、共通理解のもと落ち着いて生徒たちを避難誘導できるように、継続的に研修をし、防災意識を高めていかなくてはいけないと思う。東日本大震災から何年経過しようとも忘れてはいけないと思っている。

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

東日本大震災を体験して

第二中学校 栄養士 門馬 真弓

卒業式が無事に終了して、ほっと一息ついた時に地震が発生しました。また地震かぐらいに思ったときにぐらぐらと大きく揺れ始めました。棚から書類がばたばたと落ち、電気がぶつと切れ停電になりました。すぐに電気はつくだろうと思っていました。しかし、外では今までに聞いたことのないサイレンが鳴り響き、市の無線からは大津波警報が発令されると繰り返し放送されていました。そして、避難の車がどんどん校庭に入ってきました。昭和53年の宮城沖地震と比べものにならないくらい大変なことが起こっていると感じました。

体育館には避難の人たちがどんどん集まってきました。職員は寒さ対策に毛布や布団の準備、私たちは水の確保と思い食缶や回転釜に汲みましました。まだ、明るかったのでガス漏れがないかの確認をしてから、お湯を沸かせるだけ沸かしました。でも、後から考えるととても危険なことだった反省しました。もちろん、1時間ぐらいのあとは市ガスの方が使用禁止の札をつけていきました。それから約3週間、ガスは使用できませんでした。

塩竈市の避難場所には備蓄倉庫が設置されていましたが、学校に鍵がなくすぐ開けることができず、中に何が入っているのかもわからず職員は右往左往してしまいました。まずは、学校にあるかぎりの布団や毛布、カーテン、食器などを体育館に運び備蓄倉庫の鍵が開くのを待っていました。市の災害対策本部の方がみえてから、水や毛布、アルファ化米などを生徒とともに運び出しました。もう、その頃には夕飯の心配をする時間になっていました。

お湯を沸かすことができたので、ちょっと暖かなごはんやおにぎりを職員や生徒で作ること

ができました。ただ、暗い中での作業は作り方の説明書を読むのも大変でしたが避難してきている全員の方々にわたすことができました。懐中電灯とろうそくの灯りだけが頼りの寒くて余震が何度も続く不安な夜でした。

2日目からは、近くのスーパーからの支援物資、道路が寸断されたため、行く場所がなくなった練り製品やウィンナーなどの食料品が支援物資として届けられたりして、消費期限をにらみながら毎日の食事の提供をすることが仕事になりました。ガスも電気も水もない中で食事を作るということは大変なことでした。でも、薪で湯を沸かし支援物資のカップ麺を提供したり、保護者の方からプロパンガスを提供していただき災害用の鍋を使うことができるようになり、なんとか温かいものを提供できました。最初は、避難所の職員や学校の職員だけで対応をしていましたが、だんだん落ち着いてきてからは、避難者の中からボランティアの方を募り、食事のお世話や水の世話などをしてもらうようになりました。

この東日本大地震の体験を通して学んだことは、いくらマニュアルがあったとしても実際には突然のことがたくさん出てきて、マニュアルどおりにいかないことが多いことでした。以前に災害時に給食施設の使用について確認した時には使用しないと聞いていました。でも必要に応じて備品や消耗品、施設も使わなければならないことがありました。その時々で的確に判断できる力を持たなければと強く感じました。そして、記録をとることが大切だと痛切に感じました。電気や水道、ガスなどの復旧月日、たくさんの支援物資やボランティアの方々、避難所の食事の内容、給食施設の備品の使用状況など、今、思い出そうとしても思い出せないことがたくさんあります。こんな体験はもうたくさんと思いますが、また起こるかもしれない未曾有の出来事に対して、今回の体験が生かせるようにしていかなければならないと思います。

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

震災を通して感じたこと

第二中学校 教諭 大橋 範久

本校では卒業式が行われ、卒業生がすべて下校し、片付けも一段落したときに地震の大きな揺れを感じた。本校はその前年の夏に耐震補強工事を済ませただけであり、柱や壁に亀裂が入ったり、ガラスが破損することはあったが、幸いなことに建物が使用不能となるような大きな被害はなかった。

本校は、災害緊急用の備蓄倉庫が備え付けられており、教職員の中でも災害時は避難所になるということが分かっていたため、避難住民の受け入れに向けての準備を校内で動き始めた。しかし、当初避難所の開設運営については市職員で行うこととされており、校舎内外の安全確認と早く避難してきた住民の方の交通整理と体育館への案内を開始するにとどまってしまった。大津波警報の発令と避難を呼びかける防災無線が鳴り響く中、避難してくる人の数が徐々に増え始めていた。この時点で、市職員の方は数名到着したが備蓄倉庫の鍵が無かったために、避難所開設のための準備が後手に回ってしまった。

事前には、市と学校側での取り決めが十分になされておらず、どちらが中心となって動くのかということがはっきりせず、各個人の判断で必要と思うことから行動が始まった。とりあえず、保健室より当面の医薬品や布団などを搬入したり、本部となる場所をステージ上に確保、柔道用の畳をフロアに敷くなどを行った。避難住民には体育館のパイプイスに座ってもらっていた。

やがて、防災倉庫の鍵が開き、避難してきた生徒の協力を得ながら、ブルーシートや毛布を始め物資を体育館に搬入し、本格的に避難所の準備が行われた。外は日が傾き、停電の中、夕食の準備と物資の確認や毛布の配布などが市職

員と教職員が協力して行われた。防災倉庫内に解説マニュアルは設置されていたが熟読している余裕がなかった。これは災害が起きてからマニュアルを開いたのでは次々起きる事態に対応が追いつかなかったためである。結局それぞれが知恵を出し合い、震災当日を乗り切った。

しかし、今振り返ってみると、家族単位での区画割りを行ったり、ご高齢の方や乳児を抱えた方などへの配慮など、やらなければならないことがたくさんあったように思う。また、柔道の畳だけでなく、ひな壇などブルーシートの下に敷くことで寒さを軽減するなど学校内にある資産を十分に活用できなかったことには後悔が残っている。

今回の震災において、防災倉庫が各学校を始め、主要な避難所に配備されていたことは大変有効であった。これによって他の市町村のように避難してきた住民の食料や水、暖をとるための毛布等が全くなく、寒さと飢えに苦しむということがかなりの部分で軽減されたのではないかと思う。これは塩竈市の議会ならびに行政の先見の明と言ってよいと思う。このようにハード面での準備がなされていたからこそ、その備えを十二分に活用できるようソフト面の準備が求められるのではないかと考える。

しかし、このような大きな災害において、市職員が各避難所の開設を一手に担うことは大変難しいのではないだろうか。実際に今回の震災では、津波に阻まれ担当の避難所にすぐには駆けつけられないということもあった。これらのことも十分想定した上で備蓄倉庫を設置している学校等との連携も含めた防災計画を見直し、防災倉庫の開放などの基準となる要件や開設についてなど共通理解を図ることができると避難所開設を円滑に行うことができるのではと考える。

今回の震災において、備蓄倉庫の食料とともに食糧事情を支えたのがウジエスーパーを始め多くの企業から直接第二中学校によせられた

支援物資だった。この支援と市からの配給のおかげで、震災直後から毎日3度の食事を提供することができたことは大変よかった。しかし震災後の数日間、800人近くの避難住民の食事を確保できるかが非常に不安に感じていた。そのため地震の翌日以降に何度か高齢者世帯や介護の必要な世帯など長時間行列に並んで買い物をすることができなくなっている世帯への支援などを地域の自宅避難者の方から要請されることがあったが、その時点では要請に応えることしなかった。今振り返ってみるとその数名に食料を提供したからといって食糧が不足するということはないであろうし、自分自身では身動きが取れない高齢の方もいると言われると何かできなかったのだろうかという思いが残る。自宅避難者も同じ被災者であり、中には緊急の支援を必要としている人々もいるはずであった。数日がたち市からの配給も軌道に乗り、給水所の手伝いをする中で地域の方々と数多く接することでこのことにやっと気づいたが、結局は行動に移すことができなかった。震災直後のあの状況では広く公平に分けると言うこと自体が困難であったが、あのときに何かよい方法はなかったのかというのはその後も同僚との間で何度も話題に上がった。そのときには一部の人のみに食料を配布してしまっても不公平にならないとか、その情報から多くの人が集まってしまう対応しきれなくなる恐れはないだろうかとか後ろ向きの思考に支配され、避難所の運営のみを最優先と考えて行動してしまっていた。このように取り組みやすい一つの事柄にのみ目を向け、他の部分は気になりながらもそのままにしてしまうことは、日常の業務においても陥りやすい思考ではあるが、それを打破できる強い意志をもてなかったことが現在も後悔として残っている。

その後も学校としては、生徒の安否確認や学年末に向けての通常の業務に取り組むとともに、断水のためトイレの後始末や体育館裏に穴を掘

り臨時のトイレを設置したり、給食の調理員の方々を中心に避難所の食事の準備などに取り組んでいた。その時期私は給水の手伝いを行っていた。震災直後、何事においても見通しが立たず不安な中、多くの市民の方が集まってきていた。当初は配給する水の量も決まっておらず、1日に何回配給にこれるかも全く見通しが立っていなかった。そのため多くの市民の方々が不安と不満を訴え、給水を待つ列は大変殺伐とした雰囲気であった。当初ボランティアとして給水所の手伝いをしてもらっていた方の中にはその状況に耐えられない方もいたほどだった。その最大の原因は情報がなく、見通しがもてないということであったと思う。給水車を走らせる水道部の方も給水所で待つボランティアも、正確な情報を誰も持ち合わせてはいなかった。

二中の給水所では少しでも見通しをもってもらえるように一人当たりの給水量をあらかじめ制限したり、整理券を発行するなどの工夫を行った。すべての人々が納得いく方法ではなかったかもしれないがこの給水所としての見通しがもて、互いが顔見知りになることによって徐々に待つ側にも落ち着きが見られるようになってきたように感じられた。少ない中からでも互いの情報を持ち寄り、おおよその情報を交換することでお互いに安心しあえる面も大きいのではないかと思う。

震災からの2週間ほどは毎日が怒濤のように過ぎ去り、自分自身でもいつ何をどうしていたのか分からなくなっているほどだ。しかし、その中で日々の生活が多くの人の助けで支えられていることを再認識させられた。県内外の様々な支援だけでなく、家族やともに働くもの同士の支えや多くの人とのかかわりの中で自分自身が活動することができた。また、自分の行動に限界を設けず、時には職域を超えて行動することの重要さを感じた。その中で自分が支えてもらったものを、次の人に少しずつでも受け継いでいきたいと思う。

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

震災を経験して

第三中学校 養護教諭 佐々木 奈緒

昨年3月11日に発生した巨大地震から、もう一年が経とうとしています。県内での復興に向けての動きは徐々に形になりつつあります。私たちの暮らしもほぼ正常に戻りました。しかしながら、私は今でも余震と見られる少しの揺れにも体には緊張が走り、鼓動は早くなります。この文章を書くために震災時のことを思い出すだけでも辛い気持ちになります。それだけ東日本大震災は、今まで経験したことの無い恐怖の出来事でした。

近年、宮城県内では北部地震や中部地震が発生し、近い将来、高い確率で宮城県沖地震の発生が予測されていました。大きな災害に備えてシミュレーションし、学校で地震が発生したら自分はどのように動くのか、必要となる物品は・・・と自分なりに整理して準備しておかなければと考えていた矢先のことでした。

大地震が発生。

部活動で残っていた生徒たちと校庭へ避難し、大きな揺れに体を震わせながらいたことを今でも鮮明に覚えています。

近隣から多くの人々がぞくぞくと避難してきて学校は避難所となりました。とにかく出来ることから、対応することしかできませんでした。今思えば、場当たりのだったように反省していますが、その時は、全てが必死でした。

避難所は市職員の方々に対応していただいたのでとても助かりました。教職員は生徒たちの対応に力を注ぐことができました。地震当日の夜も保護者の方が迎えに来るまでの間、不安そうに待つ生徒たちを励まし、寄り添いました。

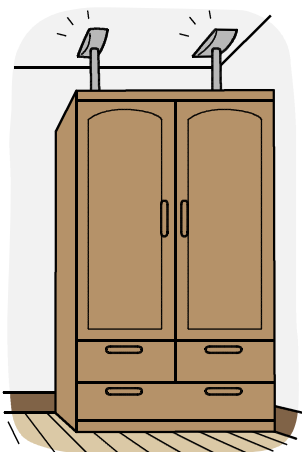
担任の先生方は、翌日から生徒の被災状況等の確認に奔走しました。

学校は、しばらくの間休校となり、職員は学

校待機の状況。校舎内はライフラインが断たれ、余震が断続的に続く中、飲み水や食料、ガソリンの確保に追われた数週間でしたが、教員間で支え合い、励まし合いながら乗り越えてきました。そして、学校再開。一番ほっとさせられたのはいつもと変わらない生徒たちの元気な笑顔でした。

私たちは、今回の教訓を生かして今後も予想される大きな災害に備えて様々なことを早急に見直していかなければなりません。

塩竈市養護教諭部会では、今回の震災時の養護教諭の活動をまとめ、実際の体験を基に次の災害に備える研究・研修を進めています。東日本大震災の記憶を風化させることなく、次世代に語り継ぎ、未来ある子どもたちのためにさらに職務に努めたいと思います。



□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

3. 11の東日本大震災

第三中学校 教頭 阿部 芳之

3月11日あの日、卒業式で、卒業生が学級で最後のあいさつを終え、先生方が職員室に戻ってきて遅い昼食をとり、一息ついた頃にやってきました。学校には、1・2年生が部活動を行うため集合し、活動が始まってから少し経った頃だと思えます。急に大きな揺れがやってきて、「これは大きい」ということで職員が校庭に避難したとき、校庭で部活動を行っている生徒は道具もそのままに、体育館で活動していた生徒も校庭中央に集まってきました。

その後、校舎からも活動をしていた生徒が避難してきました。顧問の先生が生徒の確認をしている最中に2度目の大地震が校舎を波をうつように揺れ、体育館の壁が落ち、校舎の連絡通路の壁が落ちてきました。長い揺れが収まったあと、生徒の人数を確認し、一度全員体育館に避難させました。先生方は思ったより冷静に対応し、泣いている生徒や動揺している生徒に声をかけていました。また、教室に生徒が残っていないか男の先生方が捜索に校舎に戻りました。

地震が収まったとたん、どこからともなく避難の人がどンドン学校にきました。それと同時に車もやってきました。生徒には緊急物資倉庫から毛布等を体育館へ運んでもらいました。

その後、まもなく市の職員の方が集まって、テント等の設営が始まりました。先生方は車の整理とこのままでは体育館が住民の方で一杯になることを想定し、市の方と相談して、生徒を教室へ移動させました。

体育館や校庭は人や車でごった返し、車は約500台、全部で1,200人以上は避難してきたと思えます。市の職員の方や私たちはいたって冷静に対処できたと思えます。それは、この日の約1年前の2月27日にチリ地震の津波

が塩竈に来るということで津波警報が出たときに訓練していたことがそのまま出来たような気がしましたので、職員の方はすぐに対応していました。

1日目の夜は大変長かった気がしました。夜は、寒かったのですが生徒を第一と考え教室に毛布や食料を運びました。理科の先生は豆電球を電池につなぎ、暗い中を照らすように廊下や階段等に設置しました。石油化学工場が火災になり、東の空が真っ赤に照らされているのが印象的でした。夜はほとんど眠れず、ラジオが情報の頼りでした。携帯電話は全く機能せず、メールでやりとり出来た人はラッキーでした。

ラジオからの情報を聞いていた私は、生徒や教職員の安否が流れていたこともあり、学校の状況を流すことにしました。このことが、聞いてきた家族や知人にとっては、とても安心できたと後から教えていただきました。

翌12日にかけて保護者が生徒を引き取りにきました。生徒全員の引き渡しが終わって学校から生徒がいなくなったのはお昼過ぎでした。せっかく引き取りにきて、そのまま避難所の学校の体育館に行く姿をみて、何とも言えない気持ちになったのは今でも覚えています。残念ながら生徒1人が津波にのまれ亡くなったことは、残念な気持ちでいっぱいです。

次の日から在校生・卒業生の安否確認の作業が始まりました。先生方で手分けして歩いて回りました。車では回れませんでした。理由はガソリンの不足です。情報が混乱する中、どこからともなく情報が流れてきました。私も数回スタンドに並びました。最高は6時間待ちでした。食料も調達しなければなりません。先生方も家にあるものをみんなで持ち寄ったり、店が開いていれば余分に買ったりとしました。塩竈市内の中心部に向かったときは、「こんなに人っていたかな」と思うほど人が町に出ていました。なんか、昭和の30年～40年代のような感じがしました。車はなく人混みでいっぱい

でした。しかし、もめ事もなく整然と物を買うため、レジの前に人が並んでいました。時折揺れる余震に、怖い思いをしながら。

私は、3月31日に学校避難所がなくなるまで、のべ10日ほど学校に泊まりましたが、毎日、先生方や市役所の方々、そして住民の避難してきた人と協力して生活した感じがしました。緊急物資等様々な支援をいただき感謝しています。

今回の地震で得た教訓をこれからの生活に生かしていきたいと思います。



とんどの教員も学校に泊まることになった。石油コンビナートの燃える赤い炎が不気味に夜空を焦がし、不安を一層かき立てるようだった。

教室に泊まった生徒も次の日には全員無事保護者に引き渡した。避難所対応のため夜は3名以上の教職員が交代で学校に泊まる体制が取られた。

数日後、生徒の安否確認のため、教員が手分けし、徒歩で学区内を回った。住所録と地図を頼りに、避難所と自宅をまわった。数日ぶりにあった生徒たちはみな笑顔で迎えてくれた。震災に負けず、家の片付けや買い出しなどの手伝いをしている生徒が多かった。家族の絆を感じているようだった。

そんなとき悲しい知らせが入った。卒業したばかりの女子生徒が母親と一緒に津波の犠牲になっていたのだ。間違いであることを祈りながら体育館の入口に貼ってある死亡者名簿を確認した。しかしそこには確かに名前が載っていた。頭をハンマーで殴られたような衝撃だった。頭が真っ白で、職員一同声を失ってしまった。

避難所の運営は市職員やボランティアの人たちに支えられ順調に進んでいたが、日にちが経つにつれてある問題が表面化してきた。炊き出しをしていたボランティアの人たちに、食事のことで不満を言う人がいるというのだ。やがて炊き出しをしていた人たちが体育館から引き上げてしまった。狭くて不自由な避難所で不満が出るのは仕方のないこと。でもみんなでこの困難を乗り越えようと考えることで多少のことは我慢できるはずなのです。

しかし温かい食事は少なくなっても、市職員の人たちは本当に献身的に避難者の面倒を見ていたし、学校に泊まり込んでいる私達にもとても親切に接してくれた。頭が下がる思いである。

体育館に300人以上いた避難者も、3月末までには自宅に戻ったり他の避難所に移動したりして閉鎖となった。この間、震災以降に生徒が登校したのは3月24日の修了式だけであっ

た。その日以外は休校となったため、やり残した授業は新年度にやることになった。休校のあいだ、学校からの情報を生徒に伝える手段の一つとしてメール配信を行った。公立高校の合格発表や修了式、離任式の日程など、メール担当として多くのメールを送った。次の文は3月31日に送ったメールである。この文を最後に紹介して、震災の記憶のほんの一部ではあるが、僕自身の体験談を閉じたい。

「震災からの復興に向け、一丸となっていることだと思えます。がんばろう塩竈、がんばろう宮城、がんばろう東北、がんばろう日本のかけ声のもと、みんなで手をつなぎ合って頑張っていきましょう。明日から新年度になります。1・2年生はそれぞれ2年3年へ、そして3年生の皆さんは高校生になりますね。いい高校生活が送れるように健闘を祈ります。

ところで、年度が変わると3年生はメールの受信が出来なくなりますので、これが最後のメールになります。今までいろいろとありがとうございました。健康に留意して頑張って下さい。” がんばろう塩竈、助け合おうみんなで”」



□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

「わたしたちができること」を考える

塩竈市立玉川中学校 教頭 菅原通英

1. はじめに

平成23年3月11日14時46分、卒業式からわずか2時間あまり後のことだった。私たち職員は感動の余韻の中で職員室にいた。ゆっくりとした揺れが次第に大きくなり、気づいたときには立ってられない状態で、大声で机の下など安全なところに身を寄せるよう呼びかけた。揺れがやや弱くなったところで校舎外に出て駐車場に避難するように指示して外に出ると、体育館壁面がまるでスローモーションのようにゆっくりと崩れ落ちていった。あまりに長く大きな揺れにしばし呆然としながらも、揺れがおさまったことを確認し、校長先生の指示により校舎前駐車場に職員を集め人員を確認し、職員の無事を確認。余震の落ち着きを待ってから校舎内の危険箇所の確認と生徒の安否確認を行うことを指示した。ふと気づくと、繰り返し流れる大きなサイレンと大津波警報の防災無線……10m以上の津波？何，どういうこと？！……。

避難所として避難された方々のお世話をしながら夢中で過ごした21日間を振り返る。

2. 被害の状況

本校は塩竈市の丘陵地帯に位置し、学区全体としては揺れによる被害は大きかったが、沿岸部とは違い津波の被害はほとんどなかった。生徒・保護者ともに全員無事であったことが何よりの幸いであった。

学校施設の被害状況としては、まず、体育館の東西の壁が崩落しステージの内壁が斜めに内幕に引っかかる形で倒れていた。内部の安全点検と照明等の復旧により仮使用許可が下りたのが5月、ステージ仮復旧が11月、ブルーシートに覆われていた壁の修繕完了は翌年1月となった。校舎は、教室・廊下・トイレ等の壁や柱

に亀裂が入り、校舎の継目は破損し、窓ガラス十数枚が割れ、中には窓枠ごと外れて三階から落下したものもあった。時計・スピーカー・蛍光灯・テレビ等の落下、理科室の水槽やガラス器具・天秤、音楽室の楽器、図書室の書架等、至る所で転倒と破損が見られた。校舎については、外壁や継目など部分ごとに修理は続けているが、未だに修繕完了の見込みは立っていない。プールは、プールサイドブロックが隆起し、本体は水漏れし震災当初こそ避難所のトイレ水等に使用できたものの徐々に水位低下し乾水、12月まで授業はもちろん防火用水としても使用できなかった。

3. 学校再開に向けて

校長の指示を受け、震災初日から取り組んだのは、校舎内の安全点検と生徒の安全確認だった。停電のため、安全点検は昼間の目視に限られ、主な後片付けも含め3日間かかった。

生徒・保護者・生徒宅の安全確認は、電話の不通があり、また通学路の点検もかねて、職員が手分けして徒歩による家庭訪問を行ったが、全生徒の無事を確認するまで4日、本人との連絡確認まで11日を要した。自宅に家族がない場合は、最寄りの避難所・町内会での聞き取り、スーパーと避難所への掲示による連絡要請も合わせ行った。学区外の縁者に避難した生徒は23名（全校生徒461名中）であった。

ライフラインは、電気が3月15日深夜、水道19日、電話20日と、比較的早期に復旧がなされ、大変に助かった。LPガスについても、17日に点検が完了し、使用できることとなった。

学校向かいの清水沢の頂上付近から23時過ぎにブロックごとに電気が通ったときの感激は忘れられない。各家の窓から漏れる白い光がまぶしく、3時間ほどかけて本校にまで明かりが達する様子を、飽きもせずに宿直職員同士で眺め続けた。通電したときの蛍光灯の持つあたた

かさこそが、人の営みの温もりなのだ、柄にもなく実感したひと時だった。

情報は、ラジオのみで甚だ心細かったが、市の対策本部からの情報が、震災翌日の対策会議、13日以降に朝・昼・夕の一日3回行われた臨時校長会において、校長先生からもたらされた。また、ガソリン不足から徒歩か自転車によるしかなかったが学校同士の情報交換も随時行った。

早い段階で市教育委員会から「安全確保・ライフラインの復旧・保健衛生面での安心」という学校再開への三本柱が示されたため、ともすれば早く生徒たちに再会したくて焦りがちの教職員も安心し、一つ一つ冷静に対処することができた。特に、3月23日には公立高校合格証の市内5校による協力受領、24日の修了式・離任式実施、4月21日の始業式・入学式開催等、市教育委員会のご指導の下で知恵を出し合い市内統一して取り組めたことは、得難い経験であるとともに、関係各位のお陰様であったと思う。

本校では、学校施設の破損状況により、修了式は校内放送で、始業式は中庭で、入学式は玉川小学校の入学式終了後に会場をそのまま借用し、おのおの実施した。

4. 避難所の対応

震災当日から3月31日までの21日間、避難所を開設し、全職員で対応にあたった。

震災直後の15時過ぎ、市の担当職員3名が来校（翌日から4名）し、校長と相談し、体育館の被害があり避難場所のA棟1階教室への変更を決定、職員により備蓄倉庫からの物資運搬と校舎内各所から提供できる毛布等の資材の搬入を行った。その後、宿直者を10名選抜し、来校する避難者に対応した。教職員からの宿直はその翌日から5名、21日からは3名で対応した。この間、校長・教頭は管理者として学校に連泊し、土日も職員はローテーションを組み勤務し、内容としては水汲み、調理・配膳、物

資の運搬・夜間の給油・巡回等を主に、運営に協力した。

避難者は、初日は近隣の方々20人程度であったが、2日目以降はヘリによる離島からの避難者を受け入れ、ピーク時には50人を数えた。

その後、近隣の方から帰宅されて最終的には20人弱となった。人数も場所もコンパクトであり、避難者の組織化、役割分担ともに容易で、運営については混乱はなかった。

2日目から、校庭はヘリポートとなり、物資輸送や避難の拠点となった。当初は、本来備蓄されているはずの発電機がない等、物品が備蓄倉庫に不足していたことから困ったことは多かった。特に、石油ストーブと食糧の不足には苦慮した。ストーブは学校から4台を供給した。11日は寒く、避難民を優先して職員10人は1台のダルマストーブの周囲で毛布1枚にくるまって床にごろ寝した。アルファ化米が支給されたのは2日目の夕食で、職員が買い置いていた袋菓子避難所と分け合って空腹をしのいだ。毛布も初日は足りなかった。

振り返って思うのは、避難民・担当市職員・本校教職員ともに、出会う場面ごとにいつも「何ができるか」を考え、お互いに相手のことを思いやり接することができたことの幸せである。立場や責任の所在を明確にすることは大切だが、結局は、人間同士の気持ちの交流こそが、円滑に運営できた基礎であったことを痛感している。

5. おわりに

震災対応を振り返って、反省点は多い。

特に職員に対しては、生徒は休業となったため、業務上の支障はさほどなかったとはいえ、夜勤も含め、疲労度と自身の家庭の安全確保等に問題はあったと考える。ガソリンの不足から通勤に支障をきたす中で、スタンドの情報を交わし合い、また自宅方面ごとに乗り合わせて乗り切った。食料についても、近隣のスーパーはもちろん、代表が山形県まで調達に行き配り合

った。昼食は、4月1日まで持ち寄った食料を職員が工夫して調理し合った。職員のチームワークに感謝している。

生徒の活動再開にあたって学校として相談したことは、二点である。まず、この震災体験を風化させないこと。一時間の経過に伴って、被災の程度によって感覚は異なってくる。幸い被害が小さい地域であったからこそ、この大震災に立ち会った自分を忘れてはならないと考えている。次に、今後の防災教育に、「災害が現実のものとなったとき、適切に判断でき必要な行動がとれるよう、実践的な態度を養うとともに、災害発生後、自分たちが周りのために何ができるのか」をテーマに取り組ませる、ということである。自分の身を助けるのは自分であるという危機感覚をベースに、その上で「わたしたちにできること」を常に考えられる人間に育てていきたいと思う。

震災当日の夕方、学校の様子を見に来て、心配して声をかけてくれる生徒がいた。まだ水も電気もない中でおにぎりを握って学校に届けてくれたご家庭があった。毎日顔を見せていただいたPTA会長さんをはじめ、多くの方々からご心配と激励をいただいた。感謝、の一言である。生徒たちが、はじめはぼつぼつと、次第に語り合っただ勢が、学校の整理と清掃に自主的に来てくれた。家庭の水くみ、避難所や町内会の手伝いと、がんばっている玉中生もいた。4月1日から部活動が再開できても、練習よりもボランティア活動を探し優先して「何ができるか」を行動で示してくれた部員たちがいた。

その度に、うれしく、涙の流れる思いだった。

「隣の人の痛みを感じよう。誰かのために何かをしよう。」いつも授業では言うてきた言葉だが、改めて、その重みとありがたさを受け止めている自分がいる。

危機にあたり問われるのは「人間」である。他人のありがたみを感じ、他人に思いをつなげられる人間でありたい、と願う。実感である。

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

「東日本大震災を乗り越えて」

浦戸中学校 教頭 黒澤 礼子

1 地震に襲われたその時

これまでに経験したことのない巨大地震に襲われたのは、昼食を済ませた職員室で、卒業式の余韻に浸りながら、卒業生の思い出話を耳を傾けていた時だった。

携帯電話の緊急地震速報がけたたましく鳴り響いた次の瞬間、大きな地鳴りとともに、立ってられないほどの激しい横揺れに襲われた。テレビが落下し、食器棚が倒れ、押さえていたプリンタやパソコンも落下した。職員室の中は足の踏み場もないほど物が散乱し、ガラスの破片が飛び散っていた。本校の職員室はプレハブである。このまま倒壊するのではないかとという恐怖が頭をよぎった。長い揺れがおさまった瞬間、「校庭に逃げましょう」と、職員に声をかけた。職員室を出ると、校長室の扉が廊下に倒れていた。中の書架も倒れ、ガラスが散乱していた。中にいた校長と会長の郷古さんはかろうじて難を逃れ、廊下に出てきた。みんなそろって校庭に逃げ出した。その間も、大きな余震が続いていた。校庭に出ると、雪が舞っていた。先ほどまでの陽気がうそのような、3月とは思えない寒さと余震の恐怖に震えながらも、学校に残っていた職員全員の無事を確認し安心した。

安心したその時、会場の片づけをした生徒が下校途中であることに気付いた。巨大地震が発生したのは、生徒がまだ市営汽船に乗っている時間である。彼らは大丈夫だろうかと不安になった。幸いにも出張のため、教務主任の三浦教諭が乗船していたことに気付いた。職員室に戻り、携帯電話を確認するとメールが入っていた。

「市営汽船の上でも感じるくらいの地震に襲われ一時停船したが、無事、塩竈栈橋に到着しマリゲートに避難誘導をした。迎えに来ていた

保護者も、全員マリゲートに避難させ無事である。」という連絡に安心した。校長に下校途中の生徒の無事を伝えたが、教育委員会とは、連絡がつかずそのまま、避難所の設営に奔走することになった。「学校は大丈夫ですか」という教務主任のメールに、「だめ」という返信しかできなかった自分の慌てぶりが後で分かり、恥ずかしい思いをした。

2 避難所の設営

地震直後に、元会長で消防団団員の遠藤さんが学校にやって来た。津波が来るので住民を学校に避難させるということである。校長の指示の下、受け入れる準備を始めた。校舎内はあらゆるものが倒れ、体育館までの廊下にも物が散乱していた。体育館の照明や天井も数か所落下していた。廊下や体育館の片付け、災害備蓄品や必要物品を体育館へ搬入した。シートや畳を敷き、パネルを利用した衝立も準備し、避難所設営を短時間で終えた。

数分後、住民が次々に避難してきた。高台の山道を通ってきたが、そこまで津波が押し寄せ、さらわれるかと思ったという話に耳を疑った。住民が通ってきた山道は、海岸から遠く離れ、島では学校に次ぐ高台である。そこまで津波が押し寄せてきているという話をすぐには信じられなかった。学校は安全であるという確信は何もなかったが、学校まで津波が押し寄せたら、この島に逃げる場所はない。不安を抱えながらもそれぞれの職員が避難住民の世話を始めた。暗くなる前に、女子職員が協力しておにぎりや味噌汁の炊き出しを行った。男子職員は、ストーブや明かりの準備、トイレの水汲みに奔走した。

停電と携帯電話の不通で島は全く孤立してしまった。ラジオからの情報は、各地の津波被害の悲惨さを伝えていたが半信半疑だった。火力発電所の方角の空が赤々と輝き、不気味だったことを今でも覚えている。情報が錯綜している

中、職員の大半は、家族と連絡が取れず、不安な夜を過ごすことになった。

3 児童生徒の安否確認

教務主任からは、何度か状況報告のメールがあった。「津波が防潮堤を越え、避難場所のマリゲートに押し寄せてきたのが見えた。泣いてしゃがみ込む生徒もいたので、津波を見せないように屋内に避難させた。その後、安全な4階の展望台に避難させた。大津波警報が出ているためマリゲートから出ることができない」ということであった。更に、午後9時過ぎ、「全ての児童生徒の安否確認ができた。」というメールがあった。「家を流された島内の子どもたちもいるが、全員無事である。」という情報が伝えられた。ただ、「寒風沢の生徒の親代わりである祖父母が行方不明。」だという、心配な情報が入ってきた。学校から見える距離にある寒風沢だが、連絡手段が絶たれ確認できないまま朝を迎えた。

教育委員会との連絡は相変わらず不通だった。夜半過ぎになり、教育委員会の佐藤指導主事から安否確認のショートメールが入った。教務主任からの情報を報告したが、佐藤指導主事だと思い込んで報告していた報告した相手が、佐藤総務課長だったことを震災から5ヶ月が過ぎた8月になってから知った。

翌朝、教育委員会の星課長からの電話が繋がった。児童生徒・職員の無事と避難所の様子を伝えた。その後、携帯電話は不通になり、全く連絡が取れなくなった。

4 島からの上陸

寒さと余震に震えながら、家族の安否を気遣い、長い夜を過ごした。一夜明け、職員室から見た光景に言葉を無くした。あつたはずの児童生徒の家が見当たらない。昨日までの寒風沢が思い出せないほど津波は全ての物を飲み込んでしまっていた。栈橋は流され、がれきが浮遊し、持ち主の分からない漁船が漂っていた。

通学路を歩いて栈橋に向かった。堤防が破壊

され、道路のアスファルトは剥がされ、電柱がなぎ倒されていた。昨日まであったはずの家が無く、道路は大きく陥没し、そこに海水がたまっていて通ることは不可能だった。島の方が「まるで地獄絵のような光景だ」とつぶやいた。結局、栈橋までたどり着くことはできず、あまりの光景にただ呆然と立ちすくむしかなかった。

島で孤立してから3日目の夕方、島内在住の市営汽船の乗員が船外機で島に辿り着いた。家屋や養殖施設が漂う海上で、何度もスクリューに浮遊物が絡まり、命がけで航行してきたという2人は憔悴しきっていた。彼らの情報により、マリゲートに避難していた本校職員と生徒・保護者は、翌日自宅に戻ったことを知った。道路には流された車が重なり合い、倒壊家屋やがれきが散乱しているという。家族の安否確認ができない職員の不安は高まった。

その夜、校長に野々島区長の鈴木虎男さんより、「明日の朝、船外機で職員を本土に送り届けたい」という申し出があった。「これまで避難所の運営に協力していただいて感謝している。」ということだった。

早速、上陸に向けての準備が始まった。島内の各島に赴き、児童生徒の状況を確認する職員と、すぐに上陸して島外の児童生徒の状況を確認する職員の2班に分かれて、2日間で上陸することにした。上陸後の集合場所は、市教育委員会の一階にある「けやき教室」を間借りすることになった。

5 学校再開に向けての準備

上陸してみると想像以上の被害の甚大さに驚いた。食糧事情、ガソリン事情は予想以上に悪く、職員は自転車や徒歩で「けやき教室」に集合した。遠方の職員の中には、避難所になっている市内の小中学校に泊まり込みとなったものもいる。

学校再開に向けての準備が始まったが、書類もデータもない場所での作業は困難を極めた。小学校の卒業式、修了式、離任式、そして新年

度の始業式、入学式と課題は山積していた。児童生徒は島内と島外に分断されてしまった。島内在住の用務員と調理員以外の職員は、全て上陸している。市営汽船の運航の見通しも立たない中、これまで経験したことのない状況を克服しなければならなくなった。

校長の指示の下、日々変わる状況に対応しながら、年度のまとめ作業と新年度計画、学校再開の準備を話し合った。島で学校が再開できない最悪の場合も想定し、市内の小中学校を間借りして再開する準備も具体的に始めた。その場合、島内の児童生徒はどのようにするか、数名の職員がローテーションを組み、災害復旧用に市が運行している船に乗船し、島に泊まり込んで指導するかという案も出された。市営汽船の運航が再開され、島で再開する場合は、避難所と共用して校舎をどのように使用するか。ライフラインが復旧するまでどのように対応するか。がれきが散乱し、大きな陥没のある通学路はどうするか。など毎日のように話し合った。

幸いにも市営汽船は、4月16日に運行を再開した。通常の航路は通れず外洋を航行することになった。また、運行数も減り、午後3時30分が最終便となった。授業の開始時間、授業時数を始めいろいろな制約はあったが、みんなで乗り越えた。今思い起こせば、あの時ほど職員が一丸となって、知恵を出し合い、解決に向けて真剣に取り組んだことはないのではないかなと思う。学校を思う保護者や地域の人々の大きな支えにも改めて気付くことができた。東日本大震災は、尊い多くの命を奪い、多くの犠牲を生んだ。

しかし、この困難に立ち向かった時、私たちはこれまであたりまえすぎて気付かなかった多くのことに気付かされた。全国から寄せられた多くの支援に応えるためにも、感謝する気持ち、困難に立ち向かう強い意志、希望を持って前に進む気持ちを忘れない児童生徒を育てようと固く誓い、学校を再開させた。